夕焼け通信1267号　2020.7.6

〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）13

木幡智恵美

同窓会（2）

松江で開く同窓会の観光先は神社巡りでほぼ決まり。あとは、夜の宴会場だ。人付き合いの良くない私は、飲食のできる場所に詳しくない。「子どもが生まれてから、あんまり行ってないからな」と言いつつ色々な場所の名を挙げる娘や、飲み会好きな夫から情報を得る。めぼしい店を書き上げ、インターネットで場所や料金を調べていく。候補を絞り、ここと決めたのは、建物が市の文化財に指定されているところ。飲み放題のコースつきでもお手頃な価格だ。点訳の勉強会の後、自転車でその界隈を回ってみる。いくつか目の筋を入り、やっと見つけた。いかにも文化財という感じの古風な建物で、還暦過ぎの面々に相応しい。

同窓会の前日、皆にあげるエゴマクッキーを焼いていると、宴会場に選んだところから確認の電話が入った。いつもは飲み放題一時間半のところ、何かの記念で二時間とのこと。ここに決めて正解だった。

Kからのメールでは、明日、広島組五人と、四国から来るHが広島駅で合流し、途中で昼食を済ませてから松江駅前のホテルで落ち合おうとのこと。頭の中でスケジュールを書いていく。ホテルでチェックインを済ませたら、バスで県庁前まで移動し、まずは松江城の見学。それから堀川遊覧に乗って城の周りを廻り、そのあと宴会場へ。翌日は熊野大社、八重垣神社、神魂神社などを巡り、Kには伝えていないけれど、帰りにうちで昼食を摂ってもらおうと考えている。食材はあらかた準備した。サザエは、なかなか見つからず、あちこちの店を回り、ようやく手に入れた。魚もつけ汁に漬けてある。明日の朝、サザエご飯をしかけ、シジミ汁、サラダとババロアを作っておけばいい。ご飯のスイッチを入れることと、魚を焼くことは、夫に頼んでおこう。

あと一つ。皆に食べてほしいものがある。数年がかりでやっと育ったルバーブのジャムだ。一口ずつくらいしか入らない量しかできなかったけれど。

がらがら橋日記

宮森健次

新卒の夏

泥水にのみ込まれた集落、山を抉って崩れた土砂に屋根だけを残している家、九州を襲った豪雨に甚大な被害が出ている。こんな光景をあとどれほど見ないといけないのだろう。見るだけでは済まないかもしれない。次は、自分が泥流の中を逃げ惑うことにならないとも限らない。

退職の今年、パンデミックに見舞われてみると、なぜか偶然とは思えず、新卒で水害に遭遇した縁ではないかという気がしてくるのだ。

昭和五十八年七月、島根県西部を襲った未曾有の豪雨は、死者百名を超す大惨事となった。その年ぼくは教員としてスタートを切った。一学期の終業式を終え、泊まりがけで慰労会をした帰りの車中、同乗の先輩教員と話が弾んでいたのが、途中から二人とも自然と大声になっているのに気づいた。フロントガラスをたたく雨粒の大きさと勢いが尋常でなかった。

結局雨は、その夜ずっと勢いを弱めることなく、翌日には今の球磨川流域と同じような光景を広げることになったのである。

水害の年から三年間勤務した学校は、もうずいぶん前に廃校になっている。校区の中学校に赴任した知人が、どこでどう知ったものか先日写真を送ってきてくれた。

人気のない学校は、見るからに寂しい風情だが、地域の集まりにでも使われているのか荒れている様子もなく、なぜかほっとした。玄関脇がすぐに職員室になっているのだが、目をこらすと一階と二階の境あたりに赤い線が一本張られている。水位という字が見えた。ぼくがいたころにはなかった。地域の人にとっては、大切な記憶と記録だ。水をしたたらせた雨合羽を着てせわしなく立ち回る男たち、台所用具を抱えて学校へ上がり込んで着る女たち、あの日学校がにわかに避難所となった。何も知らぬぼくは、思いつくままに要不要の判断も付かずおろおろと動く。

感謝の言葉も怒号も浴びた。情けなさに身をよじるような思いもした。社会人になって早々、牙をむく自然にねじ伏せられるなんて想像もしていなかった。

でも、あの夏がなかったら、ぼくはこんなふうに書き続けることはなかっただろう。水害のことを書いた小文に目をとめてくれた人たちがあって、声をかけられた。同人誌を始めた。その人たちと過ごすことで狷介固陋な自分をどれだけ広げられたことか。

今年、新卒で教員になった若者たちにちょっとばかり自分が重なる。思いもよらないスタートになったという点で。そして、きっと彼らも大切な対価を得るにちがいないという点で。

30代フリーター　やあ、ジイさん。小沢一郎がこのあいだインターネットテレビの番組で次の総選挙の見通しを「（野党が）まとまれば圧勝します」と断言し、「合併新党」の構想を語っていた。

年金生活者　「ひとつにまとまる」ことの威力は、寄り合い所帯の民主党が２００９年の総選挙で自民党を圧倒したことや、古くは保守合同で誕生した自民党が長期にわたって政権を担ってきたことが実証しており、それが小沢の発言にリアリティーを与えている。歴代最長となった安倍政権を事例のひとつに加えてもいい。派閥抗争が鳴りをひそめ、「安倍一強」と呼ばれるほど「ひとつにまとまった」自民党にとって野党は敵ではなくなった。民主党政権を瓦解させた党内抗争、分裂から教訓をくみ取った結果でもある。

政党の内輪もめは国民がもっとも嫌うことのひとつだ。政治家たちがけんか相手にしか目を向けなくなり、国民のほうを見なくなるからだ。だから、逆のことが起これば、つまり対立していた政治家どうし、政党どうしがひとつの党にまとまれば、国民は自分たちのほうに政治家たちが目が向けてきたと感じるはずだ。

30代　「圧勝」は言い過ぎだろう。

年金　いまの日本国民は自分たちに敬意を払わない政治家や政党を嫌う。かつては敬意を払うのは国民の側とされていたが、現在はそれが逆転した。高度経済成長によって生活水準が向上し、国民はそれに相応する処遇を政治に求めるようになったからだ。小沢が「圧勝」という言葉を使ったのは、今の安倍政権が以前は持っていた（少なくとも持っているふりはしていた）国民への敬意を捨ててしまったと見ているからと推測できる。

30代　それでも野党の合併が進まないのはなぜだ。

年金　野党がインテリの集まりだからだ。インテリは知識の世界、つまり観念の世界を相手にすることをなりわいとしている。言い換えれば、自らの存在理由を観念の世界に持っている、あるいは自らのよりどころを観念の世界に置いている。

だから、どうしても現実より観念を優先したがる。自民党のように、互いの考えの違いを棚上げして、現実の行動を共にすることがなかなかできない。生きるよすがとなっているおのれの考えを引っ込めるくらいなら、袂を分かつほうがましだと考えてしまう。

こうした特性は「徒党好き」につながっている。考えの違う者を排除し、同じ者だけで集まろうとする。人を党派によって色分けし、色が違うと、いいところがあっても全否定する。この傾向が強まれば強まるほど、党派は小さく分かれていく。現実の側から見れば誤差の範囲に過ぎない違いも、観念の世界では重大な違いに見えるからだ。

30代　なぜ野党にはインテリが多いんだ。

年金　今の野党は左派・進歩派の政党だからだ。左派・進歩派は右派・保守派に比べると理想を重視する。理想は現実ではなく観念の領域に属する。日々そこに身を置くインテリが理想に重きを置きたがるのは必然といっていい。

大多数の国民は現実に不満があっても、現実を根こそぎ変えること、理想を性急に実現することには不安を覚える。現状を守ることを基本とする右派・保守派の政党の強みがそこにある。

それは左派・進歩派の政党の弱みであり、そこを補うには理想に近づくための現実的な手順を示す必要がある。それは未経験なことを考える作業であり、未知の部分を想像力によって埋めることを迫られる。どう想像するかは人によって違うから、手順の描き方も様々になる。左派・進歩政党が内部抗争や分裂に陥りやすい理由のひとつがそこにある。私たちはその極端なあらわれをかつての新左翼の内ゲバに見た。

30代　それなら、いっそ理想など持たないほうがいいということになるな。

年金　理想なしには前に進めないようにできているのが人間とその社会だ。自民党なら自主憲法制定がその理想に該当する。この党是があったから自民党は結束を保ってきたし、それを棚ざらしにしてきたから長期政権を維持できた。

30代　インテリは右派・保守派にもいるぞ。

年金　安倍晋三の失政に対して「首相は辞めろ」と迫るのが左派・進歩派のインテリだとしたら、「首相は改めろ」と要求するのが一般の国民であり、「首相は正しい」と言い張るのが右派・保守派のインテリと言うことができそうだ。

安倍政権に対するインテリの評価が全否定か全肯定かという両極端の形を取るのは、さっきも言ったように彼らが徒党好き、つまり党派性に囚われやすい習性を持っているからだ。

党派ではなく生活を第一に考える一般の国民は、問題そのものの解決を欲するから、両極端にはふだん走らない。これに対して、インテリは中間的な態度を避けたがる。野党寄りのインテリは、とにかく政権交代を求めるようになる。

だが、問題の解決を目指すなら、政権交代という党派の論理に沿った迂路を通るよりも、国民投票によるほうが国民の意思に忠実に従うことになるはずだ。その仕組みの実現を求める声は野党からも野党寄りのインテリからもほとんど聞こえてこない。党派の論理が壁になっている。

ニュース日記　745

中村　礼治

インテリの習性